
とある魔術の黙示録

Spade

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の黙示録

【NZコード】

N91760

【作者名】

spade

【あらすじ】

春、桜の花弁が舞う季節。二年生になつた上条当麻のクラスに、とある少年が転校してきた。彼の戸籍や能力は一切不明で、噂によると彼は外部からやってきた人間、という情報もあるとか。そんな彼は、とある事件に巻き込まれてしまい。

序章（前書き）

意味不明な展開から始まります。

石畳が敷かれた、とある市街地の路地裏。

闇に染まりしロンドンの空。それは何かの前兆か、白銀の月は黒き雲に覆い尽くされる。その下で、己を照らしていた月の光が翳り、黒衣を纏つ艶やかな黒髪の女性が空を見上げた。

彼女の名は、レヴ。

元、必要悪の教会の魔術師である。必要悪の教会とは、十字教の三大勢力の一、イギリス清教に属する魔術関連の殲滅や処分を任務とした組織である。そんな彼女が、必要悪の教会の元を離れてから早一月。レヴには初めから分かりきっていたことだが、彼女らは突然やつて來た。

レヴは視線を下ろし、ぽつりと呟く。

「……、貴女たちの目的は一体何ですか？」

レヴは行く手を阻む『造られた石垣』に手を当て、見えざる敵に向かつて問い掛けた。刹那の沈黙後、その問いの答えが虚空から返つてくる。

「今はまだ……、明かす時ではありませんね」

静かだが確かに響く、透き通るような女性の声。そして、レヴの背後に音もなく三つの影が降り立つた。三人とも白いローブを纏い、

フードを深く被っている。ローブの胸には銀の十字架が描かれ、その十字架の横線と縦線が交差する部分には、血のよう赤い真紅の薔薇が描かれていた。

真ん中に立つ、透き通るような声の持ち主がフードを外す。風になぶられ、輝く黄金色の髪がふわりと靡いた。一見清楚且つ優しそうな趣のある彼女だが、何処か悪意を帯びている黄金の瞳でレヴの背を睨み付ける。その視線を悟つてか、レヴは振り返つた。

彼女の瞳に、金色の瞳の魔術師が映る。

「ローゼンクロイツ薔薇十字の女王、もといクリス。それはどういう意味です？」

「ふふ。……まだ名乗つてすらいないのに、私をその名で呼ぶとは。やはり、貴女の魔術は本物のようですね。それに貴女ならば、我々の目的を既に御存知のはずでは？」

「無論です。しかし、例え全てを知つていようと、それを些少でも公言すれば世界の理を乱し兼ねないので。故に、私の口から述べることとは出来ません」

「……成る程。つまり貴女は、この乱れ腐つた世界にまだ墮落の余地があるというのですね」

「ちつ。ホント面倒臭い女ね」

クリスの左隣に立つ女が罵倒混じりに悪態をつく。クリスはその女を睨みつけ、黙らせた。女は縮こまり、何かを呟きフードを深く被る。その一方で、クリスの右隣に立つもう一人は微動だにすらせず、黙つたままの立ち姿を保つていた。クリスは視線を戻し、レヴをひたと見据える。

「さて、单刀直入に申し上げましょ。貴女、私の仲間になる気はありませんか？」

「……。なぜです？」

「なぜ？」ふふ、貴女も嫌みたらしい人ですね。分かりきつているのに、態々問うとは

「……、」

黙り込むレヴにクリスは苦笑し、淡々と話を続ける。

「ふふ。知っていますよ？ 貴女は禁書目録の所偽で、必要悪の教会から追放されたのでしょうか？」

「な……」

「でも、私たちは貴女を見捨てたりなどしません。寧ろ、貴女を必要としているのです」

「魔術に託した未来」
Leve301

「！ どうしてその名を ！？」

「私も、元は必要悪の教会の人間でしたから。 もう一度問います。レヴ＝レアド＝ファトゥーレ。私たちと共に理想の未来を築きませんか？」

クリス もとい、クリスティアン＝ローゼンクロイツはレヴに手を差し伸べた。

「……、」

月を覆う雲が消え、再びロンドンの街を仄かに照らし出す。

禁書目録。

一〇万三〇〇〇冊の魔道書を全て記憶した、完全記憶能力を持つ少女。その名も、インデックス。禁書目録彼女の所為でレヴは必要悪の教会を追放された。必要なかったのだ。全ての魔道書を記憶し現実を支配する力を持つ彼女に対し、未来しか見れない彼女の能力など。

「私、は

だが、薔薇十字は違った。レヴを受け入れ、必要としてくれている。居場所を失ったレヴに、居場所を与えてくれようとする彼女。未来を見た時から、既にレヴの答えは決まっていた。

「……やはり、未来には逆らえませんね。 分かりました。貴女たちに協力しましょう」

クリスティアンたち三人は互いに目配せをする。そして、クリスティアンがレヴに問うた。

「ということは、私たちの仲間になるということですね？」

「はい」

「私は、貴女たち薔薇十字ローゼンクロイツを信じます」

序章（後書き）

とうあえず序章はこれにて終了です。
次の更新はいつになるか分かりませんが、頑張りますので応援ヨロシクです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9176o/>

とある魔術の黙示録

2010年11月14日22時14分発行